

健苗育成は初期生育促進と良質茎確保に向けた第一歩！

1 育苗作業計画 ～規格苗で移植する作業計画を立てましょう！～

は種時期が早く育苗日数が長くなると老化苗となり、初期分けつ発生の遅れや生育の後ずれにつながる（図1）。

- (1) 育苗作業は、移植日から逆算して計画する（表1）。
- (2) 平坦地でのコシヒカリのは種は4月20日以降とし、出穂前後の高温リスクを低くするため5月10日以降に移植する計画とする。

【表1】 コシヒカリの育苗スケジュールの例（平坦地・稚苗の場合）

育苗方式	浸種	催芽	は種	出芽期	緑化期	硬化期	移植日
加温出芽ハウス	4/10～	4/20～	4/22	4/22～	4/24～	4/28～	5/10
無加温出芽ハウス	4/8～	4/18～	4/20	4/20～	4/24～	4/28～	
加温出芽露地プール	4/10～	4/20～	4/22	4/22～	4/24～	4/28～	

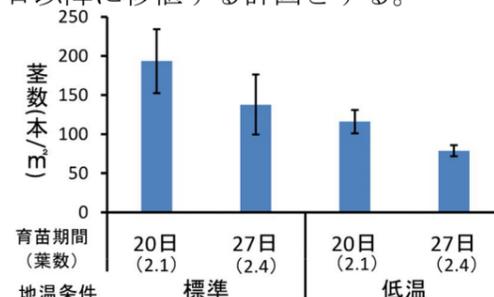


図1 稚苗の育苗期間が初期分けつの発生に及ぼす影響 (移植20日後 作物研究センター)

2 種子予措・は種作業 ～休眠が深いので、浸種水温は12℃以上で積算水温は120℃が目安～

(1) 種子予措と留意点

予措	留意点
種子消毒	近年、ばか苗病の発生が多くなっている。温湯消毒だけでは、化学合成農薬による種子消毒に比べて防除効果が劣るため、微生物農薬と組み合わせた「体系処理」を行う。
浸種	令和7年産のコシヒカリBL種子の休眠は、「深い」と推定される。発芽揃いを良くするため、浸種水温は12℃、積算水温120℃をめやすとし、他の品種（特に新潟135号とゆきみらい）も同様な対応とする。 ※種子消毒時や浸種初期に10℃未満の低水温にすると発芽ぞろいが悪くなる。
催芽	温度は30℃で1～2日をめやすとする。もち品種は発芽しやすいため、芽の伸ばしすぎに注意する。 鳩胸状態の籾が80%程度となったら催芽を終了する。

(2) は種作業

厚まきは軟弱徒長苗や育苗障害の発生につながり、逆に極端な薄まきはマット形成（根張り）不良の原因となる。
ア 育苗様式に合わせては種量を調整する（表2）。
イ かん水量は1～1.20/箱とし、箱下からしずくが垂れる程度とする。

【表2】 一箱当たりのは種量のめやす

主な品種	区分	乾籾 (g)	催芽籾 (g)
コシヒカリ	稚苗	130～140	160～175
こしいぶき	中苗	80～100	100～125
つきあかり	稚苗	145～155	175～190
にじのきらめき	中苗	90～110	110～135
みずほの輝き			

(3) 育苗管理

時期	目指す苗姿	管理方法	
		ハウス育苗	露地プール育苗
出芽期 (2～3日間)	出芽終了時 出芽長1cm程度 	【加温】 30℃設定 【無加温】 昼30℃ 夜15℃以上	・稚苗の場合は30℃で2～3日間を基準とし、出芽長を0.5～1cmをめやすとする。 ・中苗の場合は30℃で1.5日以内とし、出芽長を0.5cm（こしいぶきは1cm）をめやすとする。 ・ハウスの無加温出芽は、出芽まで4～7日程度を要する。 ・低温時は保温する等、温度確保に努める。
緑化期 (2～4日間)	緑化終了時 第一葉鞘長3.5cm程度 	昼20～25℃ 夜15～18℃	・出芽直後の苗は急激な気温の変化や強光に弱いため、緑化完了までは被覆資材で遮光する。 ・床土が乾燥している場合は、床土の温度低下を避けるため、午前中の早い時間にかん水する。 ・第1葉鞘長が稚苗で3.5cm、中苗で2.5～3cmになったら被覆資材を除去し、緑化を終了する。 ・ハウス内が25℃以上の場合や好天で気温が上がりそうな場合は、積極的に換気を行い、苗ヤケの発生を防止する。
硬化期 (12～13日間程度)	硬化終了時 葉齢：2葉 苗丈：12cm 第一葉鞘長3.5～4cm 	昼15～20℃ 夜10℃以上	・除覆後は日中にハウスを開放し、苗を徐々に外気にならす（霜注意報の発令等、10℃以下の低温が予想される場合は被覆し保温）。 ・換気を十分に行い、移植5～10日前からは夜間もハウスを開放する。 ・硬化期前半は1日1回、午前中に十分かん水し、後半は乾燥程度を見ながら1日1～2回かん水する。ただし、夕方は避ける。 ・活着を早めるため、田植え4～5日前頃に窒素成分で1～2g/箱を追肥する。 ・追肥後は、肥料焼けを防止するため必ずかん水する。

※育苗初期の高温による苗ヤケの事例がある。被覆資材の選定とともにハウス内と育苗箱表面の温度をこまめに確認し、状況に応じて換気や除覆を行う。
※露地育苗で降雨後に被覆資材の上に雨水が溜まった場合は、レンズ効果による苗ヤケを防止するため直ちに排水を行う。